婦女八賢誌

四編

二

へ13
2913
11

2913
11
昭和九年七月十六日 購求

貞操婦女八賢誌四編卷二

東都 狂訓亭主人編述

村田

第九一回

戸田の河原ゐ苦七袖九を誘ふ
夕塚の知縣ゐ二賢義婦を救ふ

前話不題武藏の國夕塚村の知縣戸塚大六ハ姪行非道の曲者なれバ過し日青柳を搦りて梅太郎ゑが詮義へせで朝暮青柳を居間ゐ伏せ酒肴ゐ変ゝ世種ゝと艶行ゝを言ひ寄る其鮮賣て公ゐ寄ねバ腹立しくも口惜しくて或ひハ罵り恥ゝしゐ業諾氣ゝ人ゐ寄さりのゝ

大六い横惡ぢるゐおどしころもろしら数斗て其情緒をもち
さんと思へど義氣ひつ青柳の爭ひ不正ゐ従ふべき緒て
數日を經るそぐゐ大六も今ハ堪へうねて青柳をきびしく
責め一間の中へ押込て更ゐ三度の食ひさへ思ふやうにあハ
ひつ三へもせぢと以前ゐ弱りし振まひハ見るる大六が女斗ゐて
余しと苦ゐ歎くきハ其堪がたきゐ見ゐ知ゐ有ん
と斯ハさろふひろうーさるん偖もまる神宮屋ゐてハ来ゐより
異血處女うまどもお袖が容貌の美麗ゐよりあ見を
おとりゐ大家へ元入金の蔓ゐありつるんと史歸密ゐ相談

其内ゐでひりけるゐ此ゐどお袖ハもろうぢもお張ゐ
誘引き家出うせしを一筋ゐ梅太郎が連出しーとうと
思へバ先金ち限りるーひるゐもしを取戻さんと思へ折
ゐも按ゐを関バその夜戸塚大六が屋敷の邸ゐおー
寄せて家財を殘らず闕所ゐー食客青柳を搦捕
ちと其導ゐつたゐうまバ史歸ハ見を聞ようも初め純
ようく思へども梅太郎ハ亡命ゐーお竹も終ゐ身を遁きて
両個ともゐ行衛知ずバ意恨ハ横も晴がゐく敵青柳を
搦向きを梅太郎が在家を尋ね怒を報ハんと思へゐて

那大六は金子を騙り頻りに吟味を急げども大六は公
青柳が艶麗なるに心まどひのうふもしてあに人と思へば色
もの憂に怪念せを空しく月日経るやがて神宮屋支婦は
意恨は堪ぜ金はあるさんと思ひ〜處女を誘ひ出されしの
ちぞ五十両の金までも盗みて此まく
ひそは涙さまざま鬼とも角とも大六が心はけんやうふうて
あ〜那青柳を拷問なれば強人日いひつづと稼く
思按を回らせうふ其頃戸田の川縁は両個の女乞食
ありて其さる妖物のごとく髪解衣裳はあらまされ
ども容貌のうつくしきを影は人あるく有ごとと噂する者の
ありけるまば神宮屋支婦は色を図より一ッの策をもうけ
まるば早速家の老僕なりける苦七とくるは祈存を頼し
緩数の銭を齎して戸田の川縁は辻うせつく件の乞
食は支をひうえて密はよのこときるひまば今宵神宮
屋まで来るべし変なうるは寝美の金は両女が望
まは但せんとひそせうは言図せけまば二個の乞食は思ハ
ぞも多くの銭を貰ひしのこと此多嫁は分限者と
なは聞へる神宮屋より新金頃は呼る変いるから

子細に知らねども褒美と聞て有仮びいろふも今宵
参るべしと両女が言ふ苦七もよろこび猶左右と約束
して急ぎ神宮屋へ立帰り主ふ首尾よきを語りて
其日の暮るを待やどふとやや晩鐘もいろうろて歌も初更
ふぞ及びける其とき神宮屋の裏口へ忍び寄り窺ふ以
前の乞食苦七と見るよりも嬉てよ深て宮あるを
ひふ庭づたひふ案内をなし中史婦ぶ居間ふ伺ひ行て
密ふ斬と報知けまば主史婦ハ喜び近よ掘先ふ立出て
両女ぶ密貌をつくづく見るふ實聞ようふ弥増せ風俗
のまろ立居振舞賤しき者と思ひまとわば主ハ深く仮び
悔く那神乞をさ〜拵き汝等両婦を呼び寄せしハ添きみ
細のひろ変ふぐら何ふ寄らぎ我言ふと頼まれて人呼まで
きうと言ふまて両女ハ驚きて吾侍等如き賤しき
者を人らしくも呼び寄ふ是斬会須ふ實ふのを仮令
ひろ変ふも世よ身ふ付ひきハ変ふら作せハ背き
ふまきまづと言ふふ主ハまたく〜仮び先彼両個ふ活
き新ふ衣類をひろえて一間の中へ伴ひ行き酒食を出
て饗応ふるうふ四辺の人を遠ざけて主ハ言話を密

つく憑きとりつくも他ならねど蘭猫〻の変ふより一個の
女出袖ぶべ梅太郎ぶ為ふ連出さるしふその夜まつ
如此〻の変ありて梅太郎ぶ家を闕所せらるる食客
青柳といふる處女い其場ゆめて石捕らるしらど那梅太
郎ぶ在家い素より妹出行も遊ありて終ふ幻滅の知る
ざるべ我怨ふ猫晴ぐらく介とて他ふ見隠もひられば
當行の知縣大六どのふ金銀駄数を賄賂して那青
柳を搦問さる梅太郎ぶ在家をべ自殺さるて捕捕
此欝憤を散ぜんと思ひしらども如何ふせん大六どの

青柳ぶ容色ふのを迷ふ是を怜悧のお法も有ざれば
斯ていつまで在らうとも意恨の晴る日ふひらぐと思へ
ふ種〻と日夜心を苦しめふたるぐ汝等両女を得て
ひとつの奇計をのふけ〻りり其子細ふ別義なるぐ汝等
彼行ふ連行此者ふ鎌倉なる由緒の人の處女なるぐ
為命めて親ふ死別我等ぐ方ふたるり来て分る是も住
方へ奉公なる〻を望む心ふ不都乗者ふ付是ども若異
なるもひらんふ側の藝
勧るべ業より好色の大六度
構つる人と言語を工とふ
大六度心ふ入るべ両女を招へ

苦七戸田河原の
乞食を説く

らるべし其ときは故郷を捨て大六屋を甘言欺計折りくへ
青柳を拷問さるる極ふ乃べし若夫しそも公儀ひて拷
問をべき氣ろるくべ折を窺ひ青柳を入亜一間の忍び入り
密ふ彼嬢を盗を出し我方へ送るべし介さる時八此方ふそ
きび〳〵彼嬢奴を責問ひて一く白状さ色ろうふ曙しと
思ふ梅太郎ふ行も俱ふ擬り捕り今の怒りを晴をべし幾八
亜人生駒の秘夏を大六屋ふ推量て八労して切るきのこみ
らで我身のうふふもくる夏ひふ俱合青柳を盗ふ出を
ふも誰が所乃ともあはざるふ必ぜを用のべし其時ふ八
我方ふゆも誘てふ繋を宮ふ為き首尾ふく那嬢を奪ひ
去るん憑をとこのふ八此方ふりと言ふまて二個の袖をひ八
思ふぞ完命と打笑て如何ふる夏うと思ひしふ青柳ふ
ふ娘公を拷問さるる連ぜきふ二ッふ一ッの今のお頼こ
箇極ふ棄ふ何とやらん侍ふる者と笑ふまてんが吾侍ふ
両個も腰ふの袖を八ふ親八京家ふ仕官して由
行ひる者ふそ侍りしが浪者の舌ふろけふまて終ふ浪人の
身とふりゆき夫より諸国ふさふふうち双親をさへ死去て
寄方なけまべ是非なくも為る職しき業ふしふ僅ふ命を

つるげども悲しき紅面さ堪ぐらく人ふ情のひるるらば
如何なる方ぬも身を寄せて華此苦を遁れんと思ひし
甲斐ふなくらぶども今雪此家へ拒るまつ人吾倫等二個が
身の儀倫命ふ替ても力を尽し貢尾ようく乃遂し其うえ
で何卒二女が身の落付倫ふ頼ひもよしうといふふ
主人ふ対ら兵衛男へ懇ごうる両女が種性いろゆも頼ミ大役を
乃ようう名八望ミの隨意よきふ浮さまべしと言ひ
つ妻ふ其意を得させ新ふ衣装を調へて両個を美
者く稼ハせ次の日貞ら大六が邸へ両女を伴ひゆき様さ
物乞せし如く如此くのよう言ひうらえて両婦を同見ふ
出せしふ按ふ遠ハぬ大六美色をよろこび媚行者ゆえ
多地両婦を厚遇ゆ昔返言ふ及びしらべ乃ちるしうと
神宮屋ハ山中密ふふ教びつそくふして立ちうけ
有者しひどふ大六ハたらうぶども佳人を得て大ふ魂も身ふ
酒ハぬ山頭ふ放氣ふ其表情ふ酒席ふふけ
件の両女ふ勝を取らせ院ふ救献ふ及びしふ彼處女
ら妖ハ肚裏ふ思ひ設け変やのりけん言語をよくふ具を
語へて種ミ数函を吃ちるふぞ謀斗大六が飽くも

喜び、わらざをとび、いよ〳〵大吃、まもなく酔て終に席ふも
堪がうくや其侭手行ふ所外て果ハ鼾とかいふ当
刻八夜も稍更てその時たうふ那両個の處女のゝ他ハ虚
寝ゐて大六が辺りゆハ兵那両個の處女ハ大六が辺り人事忘び
従ハ者もるけるば両個の處女ハ大六が辺り人事忘び
寄り寝息を須臾考へて頼見合せく完命と行矣〻まん
まと前尾よく お安さん お茶の智恵で易〻と此家へ入込ん
而已ゐらぶ此邪智深き大六奴を。お茶と両個の女先ゝ欺
ゑを酔せさうゑうハ達奴ハ寝早死人も同然此間ハ遠く

八代さん。ゐるゐ彼是ゐ聞どうて見を覚ゐ(ほそ八面倒)
そんゐう真ハ青柳さんを一間の中より敢ひ出し被て
繋を為ると通り那所村の一夜へ。体ひゆきてお梅さんハ
ゐうすゐを恐しうゑ落付先ハ浪のゐと人言人知ゐ此家の
勝ゐ若右往左往と迷歩て始めて是て八一大りと言を
八代おーゐぶ。そうゐうハ霜ひおー霜ハ吾侍が侍嬢を
歌して聞て表まゐぶ嬢ハ奥の小流とゐ達所うゐ直ハ
庭づゝひハサアどさん世と立ひづゐ最も酔き八代が文
贈ハ驚〻お安さん倡ハ下立庭面の主月代が八代ハ先ハ

盗り小院をとろざーてぞ忍びけり

第九二回

三女暗夜の走て郡詣せ騒を
奸夫奸夫を計て反身を亡を

郡詣青御へ斬るべーと神のうぞ知らうーと絶てひらぐ見べ明
暮雛面大六が仕方も邪牆の叶ぬ他と男人ばいぐ腹
立しく命とども遊ゝ道のみけ見べ若好まゝ賊あふうり
命を捨るべ見まゝあ男人立ゝ宿類も赤梅太郎と義を
結べーと言語も空しき露と消死しての後まで本意かる
らん繋へり放ばゝ如有てあらべ終へ命を奚うべー

命らんあ賊あ和を重ねんより身ら死ぬるが
増るらん勇者へ死を見て おそるとも女みの似ぬ
変ぐらを死をべき時あ死せざるべ死ゆも場ゝる和とゆ
ゝ夫がよゝーとかの中へ男人ども身ハ薄の葛ぐら
我身で家身の自由ぐらねべ死ぬも死ぬ見ぬ周果
さを感ぐる人もあゝーと吹寒の長身を冷ー抗さ人せで
辭ゝと物思へーき折とそ燈ゝ人ぐど入ぐる鋼
戸を幸度押明て忍び入る二個の處女遣方へ不
審の晴ざ見べ恋を分んとまる品をおさ人てゆ遊ゝ

環縄を伐り解き耳の寄せ頃くを青柳へ頼ようも
或ひは墨を旦使ひそんなら両個のお女中さんも安堵遊
世の縁ありてお様さんと関係を結び此度嫁へお出のところ
神宮の家の大変と私の縁談をお関ゆゑ安堵ゆゑ八ちんで
酒食ふけるの大六ゆゑ計りあつせて易くとも深遠へ吾
倩ず救ひ出してやさんしうシテお両個のお身ふと関ひ
ふけふ見て八代が那吾倩ゆゑ藻倉でと言んとをるを安ず
おー禁ゆゑ活潑ハ跡でをるる変ふめんまり間どうて若
大ちが介もなくとも家内の者が用を覚さず見まを折角

為もせさる深も水の泡とうり反りて難儀ゆゑ
あるとね八代さん八此間ゆ速く青柳さんを倩めて変うまへ
ぎと裏門ふ那村尾の草屋へと言へ見て八代打頷き
そうや合点でどんをぶお采ひとりを残してへと言へを
お安ハおー ちぶゆ ナニ乳巻ひハどぶんせん吾倩が変へ残るのも
若大六が見を覚ー 遅ゆをうける時の為ゆゑそんる変ゆ
殺合るく 倩ひ雲ゆ入る月の小蟹きうちゆ幸敷くと云
ちぶ見て八代も又青柳も辯ひうねつ ま速く小夜叉上て
寄ゆ立る裏門に小ぶくき方ゆ身を寄せて潜戸幸

雅明つく既ゐ出んとまろ拵しも此物音ゐ接き覚けん庵
行の文戸打明て僻者待と言ひつも用心接を打振く
出る両個の小僕青柳くハ代を敵仆さんと彼岸めくを跡
より徐く忍び来るお安い吏と見るようも飛鳥のごとく近
寄りて二個の男の襟ぐを抗んで此方へ引戻し・実くま人
ぎと咎ともちやく・そんなら跡を憑むぞ人・アイ合点でどざん
と言ひを後ろゐ風捨て両個ハ先へ走る行く時二個の
小僕ハお安ゲ既を振りとるち猶懲ざるゐ打つるを
右と左へ引外ーツト身を寄せて突出と当の當身ゐ二

個の男ハ須臾も得堪ぎ仰向ゐウント言ひつ仆るを見向も
せぐ逃ナ出せおり青柳追ひつるんと思元見ぬ薄
闇ゐ千草百草踏分て頻りゐ路次を急ぎつ二町三町
来ー行ーも片辺ゐ茂りー番原よりひらハ出てる一
個の癖者頭巾目深ゐ寝りー人ハ男ゥ女ゥ知らねども
お安の姿を透ー見て打点ひつ赤坂前の小笹の中ゆど
隠れけり作者曰く此男の名ハ忘れたり却説まる大六ゲ郷舘ゐ人間ゐ安の
ちやまさまー二個の小僕ハ猶須臾得よ気絶やるる
けん起も既らで居るるしゲ既ゐ半晌だるゐふしてやく

蘇生しつゝ打嘆きつゝ四辺を見るに那方安堵に行地へ往
けん要の影だも見へざるに至ひぬ月と月を見合せのま
くまぬ[illegible]ものうく[illegible]ハとて止むべきにあらざれば[illegible]
大六が居間のいとう夏如此くと報ゆゝ其時まぢも大
六猶熟睡して居るうしが今此あるを聞るも俄然として
起直り且怒りて備ハ女さとゝゆるさを大切なる
罪人を奪ひ去らるゝに猶しきよ是なる神宮屋平左衛つゞ
ひくも怠りし夏なるに命もひとつ此報ひ今ゆゝ思ひ知
せんとて多地人数を准備しつゝ大六自ら先に找して殿きに
下知して言へう汝等ゆ援き働して捕逃さんもとゝ是
ねゞ各〳〵刃を抜連て家内の奴等を殘りなく皆悉く次
尽して彼青柳等三個を再び首尾よく取久まべ
得ること言ひつゝも躰て件の神宮屋なる裏口より
裏口より三七二十一ゆ次入るゆゝ思ひ付きて夏うまバ
虜と庖行ゆ熟睡せ雑人小僕ハ周章狼ぎて喧盗
奴よ泥坊よと叫ぶを遠方の駿兵等ハ躍起りて
まつる遠方へ多勢那方へまつる不意をうられしのゝ[illegible]び
雑人どもの甲斐なきハひとりとして敵対者なく我先に

逃廻るゆゑ那駿兵等八いよ〳〵勇ミて或ひハ袈裟懸腰
車まゝ八肩先膳覚其さゝ丸を切るゝ〳〵膳間ハ十四ハ名瓶を
並べて死〳〵ゝ切る金ども戸塚大古八神官屋支婦ハ
出合ゞ況て青柳等三女のいまハ濱屋居るを知らわべ猶も
駿兵を励まして奚と納戸を心ざし金釈もゝ〳〵ゞ吹入ぬ
案ハ神官屋平左衛門八有右べ〳〵ハ露知らで郷ハ二個の
神元ハ奇斗を示して那鎗へ奉公させ〳〵支ゝ近きハ
青柳を搦問さるゝ金ゝ〳〵ゞ密ハ連出るゝハ結るゝ
左やせまゝ〳〵存やせまゝと支斗ハ支婦額を集ゝ問扶数
刻ハ乃ゝ乃ゝハ更行鐘ハ八つ支婦ハ外廻ハ入〳〵
忽地家内騒〳〵小僕の喚り叫ぶ声ハ聞きて起きる
ゝ〳〵仰天ゆゝんと起上り準備の為を引提ゝ身拵して
居る所へ間隔の襖開て先へ戸塚大古駿兵
を後方ハ追へゝ変高ハ声ハ喚ゝる者汝賊ゝ〳〵
我国沢を蒙て数年當所ハ家居様へ商賣ハ利を
貪ゝ〳〵ゞ主男報ハ思ひも せで素性知ざる婦女を
らひ家を計りて熟〳〵と案き罪ゝる青柳を奪ハ〳〵せ
汝ゝ賊婦ハ憎ゝる罪ゝ〳〵〳〵頓三女の賊婦を

お安

三女暗ふ
知縣を走る

家縛を受たれバよし不の字を言ば汝等も小僕に等しく放逐して後に賊婦の在家を尋ねん命でも白状せざるかと言へバ是で驚く六左衛門お端も俱に仰天して偖ハ二個の袖のまんまと青柳を連出しゐるに追手の人数に迫られて我方へハ来るまじ他方へ走りしものなるか然でも連出したらバ議て手続をなさんと言ひしに女子の浅き心から懸する事有出して毛を吹て此疵を求むる物なれんと流石賢智の六左衛門も那二個の袖乞をお安八代の二賢女と知らねも現に道理なり捨てまた平左衛門ハ妻の

彼是と思ひしかども遁るゝ二けハ其苦にて言ひ遁さんと思殺しゝ妻ゆも急度瞬目して大六に打附思ひ寄らざるご免これ孤題小松亥ハ梅太郎に處女を奪ひまゐらしゝ其遺恨ある方なく争で青柳を拐問なし梅が行衛を尋ね求めて今の恨を報ハんと思ひこそあれ外なく佗に組せし青柳を救ひ出べき所謂なし是にて賢察なるべしと言ハせもあへず大六ハ奮然として眼を瞬ぎ汝らが窃に言語を工み我を惑ハさんと欲するとも汝が方より口入せし両個の賊婦が青柳を奪ひ去りしぞ確る證據斯ても遁る道ありや

汝ぐどもき白徒者を白状させんと問どるうら大多の賊婦を
捕迫さび千度悔ゆとも詮なくうん騒卒遣奴等女婦を
殺して先我器を晴させよと言へまて落く祈宮屋女婦
猶言へ解んとまる祈しも頭の令ふ従ふ騒兵等各〻將
物を打振〻女婦を中ふ捕綱んで討てとるべき勢ひ平
左衛門も今ハ為も奸ハ利矢を用ゆる間なく妻のお端を
後ろふ曳ひふ鎗をもつて防ぎ戦ふ勢ひ別ふハ見ゆるもの
うう素より武道を知るふひらねば多くの騒兵ふ囲まれ
落疾四人ケ所負ひしくべ防ぎぐくや思ひけん引外して

逃げるを大六遠さど飛びうつて肩先より乳のかるまで
後袈裟ぬぞ切げうう此有様ふ猛き姫まーしい端ハ
ひも身ふ清ハど介ども横縁まる傷所ふひらねば美を
一生殺命と捕ふの中を潜う抜け逃んとまるども
女子の甲斐ふき終ふ右より左つまより眉間肩先撃ひ
なく育ふ切ふ切ふまる其所ふ命を落せーくべ大六い
地よげふ女婦ぶ死骸を見やりく猶も騒兵を励まし
家内を残らど尋ぬまども那三個の處女ハさらうり
姉女子も熱て逃ようけん人影さへも見へざれば大六い憤

怒のこ終ふ堅こを失ふて又淫術もうき保ふつゝ思ひ
思ひせば我一朝の命をも仏神宮屋支輝を殺せしぶも
賊婦の約束知るざれば其尾を砍て頭を放るの如くして
今更の稱贖償ハ猶ぐし鬼とても角とても此恨ゆそ
賊婦を取も戻さぶば我一分の立ざるのみ他の批判も
免まぶを命ふば今より多分ぶるゝて近々近在隣国まで
尋ね求めて搦捕今の思ひを散ぜんと俄ふ多勢を
折しも多地大六が郡舘の方ふ猛火盛んふ燃ひぐり天
をも焦を勢ひうまぶば大六再び打頷き郎の方ふ火有ど

驚き急げと言ひつゝも怒ふ月のうき大六うまぶ一品ゆ
せよ我正を焼て捕のうまる瀬なしと處女が泣義も打
捨て息をもつぐ走せ去りける
實や天道ハ善ふ与し悪を懲まと那青柳が義心なる
一回悪ふふ因りるまども又まろふざる助あり神宮屋支
婦が奸悪なる姫ハ巨萬の黄金を積とも早ふ非命の死を
遂るぶ只大六が非道のみ天爭の色をゆるさん開ハ
末の巻ふ解分を見てあらん